私の名前はツバキ・タカチホ。

ごく平凡な小学五年生。

少しだけ普通と違っているとすれば、それは私が〈機獣少女〉の仕事をしている事くらいだろう。

けどそれは、この惑星ゼヘナにおいてそこまで特筆するような事ではない。〈機獣少女〉は他にも大勢いるし、その正体を明かしてはならない――という訳でもない。むしろ、その存在を世間にアピールする事で、人々の希望となる事を推奨すらされている。

〈機獣少女〉とは本来、敵性体である〈カタストロ〉を殲滅（せんめつ）するための手段だったはずが、何時（いつ）しかその存在は『アイドル』と呼ぶべき形態へと変化していたのだ。

とはいえ、アイドル活動（それ）も強制されてはいない。あくまで本業は〈カタストロ〉の殲滅であり、各媒体（メディア）への対応は個人の自由意志に任されている。取材や番組出演を拒否する者もいれば、積極的に売り込んでいく者もいる。

ちなみに、私はどちらでもない。積極的にアイドル活動を行おうとは思わないが、申し出（オファー）があれば、可能な範囲で応える事にしている。これは所属している〈オフィス・タカマガハラ〉の方針でもあり、そういった姿勢（スタンス）の〈機獣少女〉が主に在籍している事務所という言い方も出来るだろう。

〈機獣少女〉。

かつて最強兵器として君臨した者達の力を以（もっ）て戦う少女達。

〈カタストロ〉。

かつて最強兵器として君臨した者達の力を以て災厄（カタストロフ）を招こうとする者達。

両者の対立はやがて仕組み化（システム）し、人々の日常（ルーチン）に組み込まれた。

〈機獣少女システム〉開発時は人類存亡の危機とまで騒がれたそうだが、まさかそれを纏（まと）って戦う少女達がアイドルと同一視される日が来るとは、誰も予想しなかっただろう。

今や〈カタストロ〉の脅威は完全に形骸化していた。それこそ、〈機獣少女〉がアイドルとしての活動をこなせる程度には、この世界は平和な時代を謳歌していた。

生まれた時には、それが当たり前で、だから、そんな当たり前がずっと続くと誰もが思っていた。

それが当たり前でなくなるまでは……。

これは私が地球から惑星ゼヘナに帰還し、ヒナミ・シティにおける〈スティンガー〉殲滅(せんめつ)作戦――〈ヒナミ総力戦〉開始二日前までの回想録である。

サイドストーリー #12

『回想録』

人間の集中力は長続きしない。長時間同じ作業を続けていれば、肉体か精神、もしくはその両方が疲弊し悲鳴を上げる。適当なところで区切りをつけ、適度な休憩を挟む事は、むしろ推奨されている。

「……んっ」

ペンを置き、軽く伸びをする。思いのほか集中していたらしく、ある種の緊張状態から解放された事で、自然と大きな吐息が漏れてしまった。誰もいない自室である事に安堵しつつ、私――ツバキ・タカチホは机に広げた厚めの冊子に視線を戻す。日記帳だ。

私は日記をつけている。

個人を特定されない形でネットワーク上に公開している訳でも、読者に向けた記事でもない、完全に私的な記録だ。

転移現象で地球に跳ばされ、ゼヘナに帰還してからは書く余裕がなかったが――大きな作戦を明後日に控え、思いがけず時間を持て余していた私は、日記の空白期間を埋めるべく筆を執っていたのだ。

「……ふふっ」

地球に滞在していた間の出来事を振り返り、思わず笑みが零れた。たった八日間の事なのに、とても長かったような気がするし、あっという間だった気もする、不思議な感覚。強いて言えば夏休みに近いかもしれないが、それよりも遥かに濃密な時間だったのは間違いない。

〈カタストロ〉との戦闘中、私は謎の転移現象によって地球に跳ばされた。

見知らぬ土地で、私を助けてくれた現地の少女・流遠やみひめさんとの出会い。姉妹のように同じ部屋で暮らし、満足に戦えない私を手伝ってくれた、一つ年上の強くて優しい、普通の女の子。

地球での出会いはもうひとつ。

「橘さん……」

橘アサトさん。やみひめさんを通じて知り合った現地の高校生。やみひめさんが想いを寄せている少年で、彼もまた、彼女を大事に想っているのは、近くで見ていて判った。それは妹のような対象として大事に想っているのかもしれないし、そういう意味でなら私だって彼には親切にしてもらった。髪留めだってプレゼントしてもらったし、一緒にクレープを食べた事だって――

……何を張り合っているのだろう。

とにかく――地球に跳ばされた事自体は不慮の事態だったが、こうして振り返って笑えるくらい、今の私にとっては良い思い出となっている。

「――ふぅ」

小休止を挟み、空白のページを埋める作業を再開する。ここからはゼヘナに戻ってからの出来事だ。

ゼヘナ暦二〇十六年――十月八日。

やみひめさんの協力により、地球での〈カタストロ〉殲滅を終えた私は、現地で出会った魔女のような装いの少女、ベアトリーチェさんとタオエンさん――ファフロウ姉妹によって、半ば諦めていたゲヘナへの帰還を果たした。驚いたのは時間のズレで、私が地球で過ごしたのが約八日間なのに対し、ゼヘナでは私の位置情報が消失して二十時間ほどしか経過していなかったのだ。

十月九日。

昨日に引き続き、事後処理に終始した。とにかく大変だったが、それでも『〈機獣少女〉が無断で行方をくらました』にしては、穏便且つ迅速な幕引きだったと思う。平和な時代とはいえ、〈機獣少女〉は武力を行使する存在だ。〈機獣少女システム〉は各メーカーにとって重要な機密だし、政治的な利用価値もあるはずだ。それを思えば、わずか二日で解放されたのは奇跡に近い。これは同行してくれたファフロウ姉妹の証言と、多くの人による口添えのおかげで、感謝の念に堪えない。

十月十日。

久しぶりの登校。私の体感時間では十一日ぶりだが、周囲からすれば四日ぶりに学校に来た事になる。たかだか一週間の違いでしかないので、すぐに意識すらしなくなるのだろうが、やはり不思議な気分ではあった。

久々の学校で変わった事が、もうひとつ。クラスメイトのスミレ・ヒノカゲさんと親しくなった。ヒノカゲさんは以前から刺々しい態度で私に接する人で、私の事は嫌いだけど、委員長として仕方なく世話を焼いてくれる責任感の強い人――という認識だった。だけど私は地球で知った、彼女のような人間を『ツンデレ』と呼ぶのだと。ヒノカゲさんはただ、恥ずかしがり屋で優しい人なのだ。

放課後、ヒノカゲさんと初めて校則違反の『買い食い』をした。彼女には『変わった気がする』とも言われた。地球での経験は、自分で思う以上に私という人間に大きな変化を齎したのかもしれない。

初めてといえば、授業中に居眠りをしてしまったのも初めてだ。その際、橘さんに

迫られる夢を見たけど……うん、これは書かないでおこう。

ヒノカゲさんと別れた後、ファフロウ姉妹の妹・ベアトリーチェさんとコンビを組んで、同じ事務所の〈機獣少女〉達と模擬戦を行った。〈エグゼキューター〉の力は凄(すさ)まじく、戦闘スタイルだけでなく、技術体系そのものが〈機獣少女〉とは違うのだと改めて感じた。即席とはいえ、そんな彼女とコンビを組んですら、カナコさんには敵わなかった事も追記しておく。

カナコ・T・シングウジさんは〈機獣少女〉の先輩で、プライベートでも私を気にかけてくれるお姉さんみたいな人。とても綺麗で、強くて、高校二年生とは思えない大人びた少女。ゼヘナに帰る――帰りたいと思えた理由の多くを占める、とても大切な存在。

だが、地球での出会いは、カナコさんをそれだけの存在のままにはしてくれなかった。

彼女は橘(たちばな)さんの妹かもしれない――そんな可能性が生まれたのだ。

「……」

ここから先は気が重い。カナコさんとの前述の話題の最中(さなか)、事件は起きた。

新たな敵性体――〈プレケース〉の出現である。

〈カタストロ〉とは明らかに出自が異なるそれは、群れを成し、人々を蹂躙(じゅうりん)した。

市民にも〈機獣少女〉にも大きな被害が出た。前代未聞と言ってもいい。事実上、〈カタストロ〉が脅威と呼べなくなった現代において、戦闘で死傷者が出る事など一度もなかったのだから。

十月十三日。

〈プレケース〉襲来から三日が経過。とにかく目まぐるしく動き回っていたため、その間は特に書くような事がない。ひたすら戦い、あとは休むだけの日々が続いた。

三日間の攻防の末、戦況は膠着(こうちゃく)状態となる。未知の敵に対する動揺から立ち直り、〈機獣少女〉が本来の実力を示した結果だ。〈プレケース〉の群れで行動する習性は厄介(やっかい)だが、単体での戦闘力は〈カタストロ〉とそう変わらないというのが、これまでの戦闘から明らかになった。

とはいえ、〈機獣少女〉の重傷者は五十名を超え、一般人の死者・行方不明者は把握されていない。

人的被害だけでなく、〈ジェネレーター〉も四基が停止。これは単純な機能という意味ではなく、機関(エンジン)である機獣のコアが生命活動を終えてしまっていた。〈カタストロ〉が引き起こす『消滅現象』こそないが、それでも大量のエネルギーを必要とする現代文明にとって痛手である事は変わらない。

状況は更に変化する――〈カタストロ〉とも〈プレケース〉とも異なる来訪者が現れた。

私が地球でお世話になった流遠やみひめさんと、橘アサトさん。そして、〈カタストロ〉によって意識を奪われ、戦う事となった少女クラウ・P・ブランさん。以上の三名だ。彼等は地球に跳ばされた際の私と同じく、原因不明の転移現象によってゼヘナに跳ばされてきたようだ。

猶、これは余談かもしれないが、私が地球を去った直後に『世界改変』としか説明出来ない現象が起きたと聞かされた。私と〈カタストロ〉が地球にいた痕跡のすべてが消え、人々の記憶は書き換えられたが、やみひめさんと橘さんだけは改変前の記憶を維持していたらしい（ブランさんは転移の直前に改変前の事を思い出したようだ）。

それはつまり、私が地球に滞在した事実が消えてしまった事を意味する。暗示によってやみひめさんのご両親を騙していた私に、感傷に浸る資格などない。それでも、『親戚の子』として良くしてくれた人達の記憶から、一緒に暮らした数日間の思い出が消えてしまったというのは、とても寂しいと感じた。

「家の『お手伝い』なんて、もうする機会はないと思ってたのに……」

食器を並べたり、洗濯した衣類を畳んだり、家事は普段からやってはいるが、それは『誰かのため』ではない。母が心を病む以前――家族が円満だった頃に戻ったようで、少しだけ懐かしかった。

だけどもう、忘れてしまった――いや、最初からなかった事になるのか。

嘆息し、思考を切り替える。今は記録を続けよう。

来訪者の三人はゼヘナの状況を知ると、事態を終息するために協力を申し出てくれたのだが、そこからが大変だった。ブランさんが〈機獣少女〉となるためにＭＢデバイスを使い――暴走。私とカナコさん、ベアトリーチェさん、そしてやみ子さんの四人がかりで止め、最終的に彼女はＭＢデバイス〈ラインハイト〉と契約を結ぶ事に成功した。

なお、ブランさんの件の直前に、キリエ・ソウマさんと顔を合わせた事も追記しておく。カナコさんへの対抗心は相変わらずだった事も。

「あとは……」

ブランさんが契約後の検査を受けている間、私はゼヘナに戻って初めて、橘さんに頭を撫でてもらった……それはまあ置いておくとして――問題は彼の事だ。私はブランさんのＭＢデバイス起動試験前に、カナコさんに橘さんの事を伝えていた――彼がお兄さんかもしれないと。それはカナコさんが地球から来た可能性の示唆でもあった。カナコさんは身

元不明者として養護施設で育った過去を持つ。地球に跳ばされた私の例、そして地球から跳ばされてきた来たやみひめさん達の例を鑑みれば、カナコさんも転移によって地球から来た可能性は大いにある。

十月十四日。

この日は三つのグループに分かれての行動となった。

ひとつは私達が拠点として使わせてもらっている〈L．C．ファクトリー〉での待機組。〈機獣少女〉となったばかりで、まだ検査や調整を必要としたブランさん。そして、未知のMBデバイス〈ヤタガラス〉を使うやみひめさん。この二人は同施設の最高責任者であり、技術者でもあるロゼット・コダール女史によって、装備を徹底的に確認され、改めて模擬戦を行ったらしい。

状況が落ち着いたら、ブランさんとは個人的にお話ししてみたい。地球で相見えた際は、意識を〈カタストロ〉に奪われていて、ゼヘナに来てからもゆっくりと話す機会はなかったから。

「やみひめさんとはクラスメイトだから、私とひとつしか違わないのか……」

とても綺麗で大人っぽく、高校生のカナコさんと同年代に見えるが、実際には小学六年生で、それをコンプレックスに感じている……なんだかとても親近感が湧いてしまう。

そして、もうひとつのグループ――の話をするにはまず、昨日の出来事を書く必要がある。ブランさんが無事〈機獣少女〉となり、これから共に戦っていこうという雰囲気の中、〈プレケース〉が各地で撤退を始めたと報告があった。本来であれば朗報のはずだが、〈プレケース〉を知るファフロウ姉妹の知識と、ロゼットさんが知る機密事項により、私達はひとつの可能性に行き着いた。

〈プレケース〉は撤退したのではなく、行動を次の段階に移した。それに〈エリアD〉と呼ばれる場所に封印されている機獣を利用するのではないか。

ロゼットさんを通じてこの可能性は中央政府に上申されたが、取り合ってはもらえず、私達は独自で行動を起こす事を決めた。それがもうひとつのグループである。メンバーはファフロウ姉妹の二人。そして、有事の際の独自裁量を認められた〈機獣少女〉、アイナ・ボーグマンさんとルイゼ・ルンシュテッドさんの二名が同行者として加わった。ちなみに、何処から聞きつけたのか、キリエ・ソウマさんが彼女等の乗るカーゴトレーラーに密航していたらしい。

最後は自由行動組――私とカナコさん、そして橘さんの三人だ。本来であれば〈エリアD〉に向かうのは私とカナコさんであるべきだが、立場上、我々はそれが許されない。

私もカナコさんも『二つ名』持ちの実力者だが、所詮は一兵卒も同然。勝手な行動は出来ない。だからこそ、独自裁量を認められた二人に、ファフロウ姉妹の同行を頼んだのだ。

自由行動とはつまり、呼び出しに即応さえ出来れば何処で何をしようと構わない。訓練も考えたが、状況がどう動くか判らない以上、休む事も必要だ。そこで、手の空いている私とカナコさんで、せっかくだからと橘さんにこの街――オオミヤ・シティを案内する事となった。

「……」

この『お出かけ』について思うところは色々ある。先に予定していた事とはいえ、〈エリアD〉に向かったメンバーの事を思うと、呑気に遊んでいられる気分ではなかった。そんな私をカナコさんと橘さんは気遣ってくれて、嬉しかった。一緒に公園で軽食を摂って、楽しかった。地球で橘さんに買ってもらった髪留めに気付いてもらえて、『似合ってる』と言ってもらえて――ドキドキした。

「……ふふっ」

思わず笑みが零れてしまう。きっと他人には見せられない緩んだ表情になってしまっている。本当に誰もいない自室でよかった。

気を取り直し、記録を続ける。

それから――そうだ、私の髪留めが橘さんからのプレゼントだと知り、『怖い』カナコさんが出てきたのだ。

私はカナコさんが大好きで、姉のように慕っている。

ただ、それはそれとして――偶に彼女が垣間見せる『心の闇』には戦慄を覚える。

これは深く触れないでおこう……。

本題はカナコさんの闇ではなく、それをきっかけに橘さんの妹さんの名前が『カナコ』だと知れた事だ。東方大陸においては珍しい名前ではない。だが、こんな偶然がそうそうあるとも思えない。

この時点で、カナコさんと橘さんは、互いの身の上を把握し、互いを兄妹ではと感じている。問題は、それを証明する手段が何もない事だった。

もどかしい気持ちを抱えながら、状況は一変する。街を襲った光の一閃――後に荷電粒子砲の一撃だと判明――と、無数に現れた新たな異形。

私達は橘さんを護衛しつつ、拠点である〈L．C．ファクトリー〉へ戻った。その際、私とカナコさんは、やみひめさんが地球での『世界改変』直後、恐慌状態だった事を知らされた。考えてみれば無理もないだろう。自分が関わった大きな事件が『なかった』事になり、誰も覚えていない――それは自分だけが世界から取り残されたような恐怖だと思う。

だからこそ、橘（たちばな）さんが覚えてくれていた事は、彼女にとって救いだっただろう。

この話を聞かされた時、私はほんの少しだけやみひめさんに嫉妬（しっと）した。彼女が橘さんにどれほど大事に想われているか、改めて判ってしまったから。

……その分、カナコさんとは共感出来（でき）てしまったが。

カナコさんも、私と同じような気持ちだった。橘さんが兄なのか他人なのかはまだ判らないが、彼はすでにカナコさんの中で特別な存在になりつつあったのだ。だからこその共感だったのだと思う。ゼヘナが大変な状況で、こんな感情は不謹慎かもしれないけど。

その後、別行動だったメンバー達が〈L．C．ファクトリー〉の談話室に集合。まさかその日の夕方前に、こんな形で集合する事になるとは思わなかった。

〈エリアD〉に向かったメンバーのうち、ファフロウ姉妹と、密航していたらしいキリエ・ソウマさんが行方不明。ボーグマンさんとルンシュテッドさんの二人は、現地で蠍（さそり）型の敵性体群と交戦。付近上空を飛行中だった二人の飛行型〈機獣少女〉によって、九死に一生を得たらしい。猶（なお）、街に現れた未知の敵性体群の特徴が、彼女等が〈エリアD〉で交戦した敵性体群に関する報告と一致。確認後、同一のものと認められた。

それから、街を襲った閃光が封印施設内から発射されたものであり、撃ったのは封印されているはずの機獣だという推測から、ひとつの仮説が浮かび上がった。

機獣の封印を解いた者の存在だ。

そんな禁（タブー）を犯す者がいるはずない。ゼヘナの人間であれば考えもしない事だ。だが、仮説を思いついた橘さんは異邦人。先入観を持たないが故（ゆえ）の、ひょっとしたら当たりの発想なのかもしれない。

実際、封印は破られていた。

コアをその身に宿したまま封印されていた機獣が姿を現し――数時間後、街をひとつ陥落（かんらく）させた。

後に〈クシマ撤退戦〉と呼ばれる戦い。

クシマ・シティの住民を避難させるため、二十人の〈機獣少女〉が遅滞作戦に参加し、十八人が犠牲となった。

十月十五日。

中央政府が、封印されていた機獣を〈スティンガー〉と呼称する事を発表。予測進路上の住民に対し、避難命令もしくは避難勧告を発令。

〈スティンガー〉の出現に乗じるように、〈プレケース〉も各地で行動を再開。

混乱が広がっていく。

十月十六日

北上を続ける〈スティンガー〉によって、更に三つの街が陥落。中央政府は前代未聞の状況に加え、避難民への対応と〈プレケース〉対策で手一杯――という名目らしいが事実は不明――となっていた。オオミヤ・シティへの到達も時間の問題となり、私達は独自に行動を起こす事となった。

以下、この日に行われた集会における特記事項を羅列。

〈スティンガー〉は古代種と呼ばれる特殊な機獣である。

同じタイミングで〈エリアD〉とオオミヤ・シティに現れた敵性体群は、その幼体。

〈スティンガー〉が街へ侵攻する理由は、〈ジェネレーター〉に組み込まれている機獣のコアを幼体に与えるため。

つまり、〈スティンガー〉の目的は『繁殖』であり、やがて幼体は成長し、同じように繁殖を繰り返し、将来的に増えた〈スティンガー〉によってこの星は彼等のものとなる。

ちなみに、これらはロゼットさんの秘書だというアニス女史によって語られた内容で、驚くべきは彼女自身も古代種だと明かした事だ。

機獣。

そして古代種。

かつて最強兵器として君臨し、今でもMBデバイスとして〈機獣少女〉の相棒であり続けているが、私達は彼等について知らなすぎるのではないだろうか。

「〈カグツチ〉……」

ふと、待機モードになっている私のMBデバイス〈カグツチ〉に視線を向ける。今は黒い勾玉の姿で、ネックレスのように卓上の専用台座に鎮座している。『彼女』もまた、詳細は不明だが特殊な機獣だったらしい。

『――何か悩んでおるな』

拡声器を通したような機械音声が答える。出会って日が浅い頃は、時代がかった口調に女王のような凄味を感じていたが、今では慣れたものだ。

「悩みというか……貴女達機獣は、人間をどう思っているんですか？」

『ふむ？』

「大昔は人間を乗せて戦争をして、今でもMBデバイスとして戦わされて、嫌だと感じたりはしないんですか……？」

『あの古代種――〈スティンガー〉を見て思うところがあったようだな』

「……はい」

なるほどな――と納得し、〈カグツチ〉は続ける。

『それは人間と機獣の価値観の相違だ。人間は戦うという行為に否定的な感情を持つようだが、我々は違う。程度の差こそあれ、戦いは最も快楽を得られる行為と言える』

それはつまり、『美味しい』とか『気持ち良い』という事だろうか。

『判りづらければこう言い換えよう――我々にとって戦いとは楽しい行為なのだ。これに勝る快感はない』

強い闘争本能を持ち、それを満たす事こそ至高の悦び。だからこそ、身体を機械に換えられ、機体すら失った今でも、機獣は人間と共に在り続けている。

機獣とはそういう存在なのだと語る〈カグツチ〉の口調には、一切の躊躇いがなく、私には誇らしさすら感じられた。少し、羨ましいとすら思った。

「……では、人間そのものについては、どう思っているんですか?」

あくまで、『道具』である自分達を使用し、欲求を満たすためだけの存在なのか。

『私には機獣だった頃の記憶がない。自分がどのような機獣だったのかも憶えてはおらん。故に搭乗者だった者も、人間そのものをどう思っていたかも、今となっては思い出せん』

どこか他人事のように淡々と続ける、記憶を失った元は機獣だった者。

『だがツバキよ、少なくとも其方の事は快く思っている。愛い娘だ』

〈カグツチ〉の口調は一貫して変わらない。からかう訳でもなく、ただ事実を語っているだけのように感じる。

『其方だったから、私は契約に応じた。応じてもよいと思えたのだ。正直、人間そのものには然して興味はない』

「……理由を訊いても?」

『さてな。そればかりは判らん』

それはそうだろう。何か理由があるのだとしても、記憶がない〈カグツチ〉に判る筈もない。性別を持たず、人間ですらない機獣が、外見で私を気に入ったという訳でもないだろうし……。

『まあ、なんにせよだ――ツバキのためであれば、私は喜んで其方の矛となり、其方を害するすべてから護ろう』

まるで、お姫様を前にした騎士のような台詞だ。実際に戦うのは私だけど。

『余計な事は考えるな。〈スティンガー〉は我等の生存権を脅かす敵だ。ならば、降りかかる火の粉は払うのみ』

これは正当防衛だ。自分の身を護るのに理由など必要ない。

それは私も理解している。

だが、考えてしまう。それが自然の摂理だとしても、淘汰される側は理不尽ではないかと。

「……そうですね」

それでも、そうするしかない。私だって死にたい訳ではないのだ。ならば割り切るしかない。これまでだって、そうしてきた。そうやって戦ってきたのだから。

日記帳を閉じ、再び伸びをする。ずっと机に向かっていたためか、身体は運動を、脳は糖分を欲していた。

「少し散歩でもしましょうか。何か軽く食べて、やみひめさん達の様子を見に行って、それから夕飯をご一緒してもいいかもしれません」

今日と明日の二日間、私とカナコさんは明後日の作戦に備えて休暇をもらっている。日頃の鍛錬は必要だが、私達はもう伸びしろがあまりない。二日の特訓で得られるような成果は期待出来ないのだ。

しかし、数日前までただの小学生だったやみひめさんとブランさんは違う。〈機獣少女〉としての力は間違いなく高いため、訓練次第でいくらでも伸ばす余地がある。今頃、二人はボーグマンさんとルンシュテッドさんの教導を受けている最中のはずだ。

『それが良い。もっとも、あの二人に食欲が残っているかどうかは疑わしいが』

「あー……」

ボーグマンさんとルンシュテッドさんの教導は厳しい。疲れ果てて食事が喉を通らない可能性は大いにある。作戦を控えているため無茶はしないだろうが、多少の無茶をしてでも『仕上げる』可能性はある。それが生き延びるために必要だと判断したのなら。

『ツバキ、カナコから着信だ。拒否するか？』

「駄目ですよ。繋いでください」

苦笑して答えると、渋々といった様子で〈カグツチ〉は自らに内蔵された通話機能を起ち上げる。カナコさんは今日、ご友人のミズキさんと会っているはずだ。

「――判りました。では、後ほど〈L．C．ファクトリー〉で」

これからの予定を訊かれ、夕方にカナコさんと合流する運びとなった。夕飯は何がいいだろうかと頭の片隅で考えていると――

『そうだ――ツバキ、プライベート用に携帯を持ちなさい。そのポンコツは信用ならないわ』

と、皮肉たっぷりの言葉を最後にカナコさんは通話を切った。どうやら〈カグツチ〉が着信を拒否するかと言った時点で、すでに通話状態だったらしい。

『ふん。カナコめ、常にツバキと共におる私が羨ましくて仕方ないと見える』

「あはは……」

この二人は相変わらずだ。じゃれ合っているようなもので、険悪でないのがせめてもの救いだが。

「では、着替えますね」

『せっかくだ、あの髪留めにするがよい』

『あの』というのは、地球で橘さんに買ってもらった赤い紐状のものだ。〈カグツチ〉はこの時の事を知らないので、教えるとひどく落ち込んでいたが、付けて見せると機嫌はすぐに直った。どうやら気に入ったようだ。

『橘アサトも褒めておったしな。気を引くには有効であろうよ』

「そんなつもりはありませんよ」

『やみひめに気を遣っておるのか？　もったいない。其方が本気を出せばイチコロであろうものを』

「イチコロって……」

〈カグツチ〉は口調に似合わず、妙なところで下世話というか、しかも私を過大評価している節がある。けど、もう髪留めの封は切ってしまった訳だし、あと何回、見てもらえる機会があるかも判らないのだし、せっかくだから髪留めはあれにしよう。別に他意はない。付けているのに気付いた橘さんが嬉しそうにしてくれていたからとか、そういう浮かれた理由では断じてない。

……嘘だ。気付いてもらえて、似合うと言ってもらえて、嬉しかった。

明後日の作戦は危険なものになる。悔いになるようなものは残すべきではない。

カナコさんが合流するのは夕方で、やみひめさんは教導中。橘さんは〈L．C．ファクトリー〉にいて、彼自身は特にする事はないはず。

だったら――

この日、私は少しばかり橘さんに甘えてみた。

上手く出来ていたかは自信がないが、彼が少し戸惑い気味だったのは、良くも悪くも私の行動が普段と違ったためだと思う。願わくば、良い印象であってほしい。

今日の日記の内容はとても他人には見せられないと思う。

でも、構わない。

日記とは本来、そういうものだから。

ＥＮＤ

あとがき

どうも、流遠亜沙（るとおあさ）です。

『ゾイやみ』サイドストーリー＃12をお届け致します。

本編が半年以上更新されてないため、今回は第二部をツバキ視点で振り返る内容となりました。普段よりページ数は少なめですが、過去のトピックスのチェックや、モチベーションの低下により、時間だけはかかっております。夏バテ的な事かとも思いましたが、どうも鬱（うつ）症状に近い状態で、普段以上に眠れないし起きられないし、そのくせ起きてるのが微妙につらいという、執筆を行う上で最悪の状態（コンディション）……。

そんな状況だったためか、微妙にツバキが乙女っぽい感じになっておりますが、そんなんどーだっていいから冬のせいにして暖め合おう（by T.M.Revolution）。

では、よきところで謝辞を。

ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。『しっかり者の妹』や、『世話焼きの後輩』って良いよね――そんな願望を詰め込んだのがツバキというヒロインです。この情熱（パッション）が伝わる事だけを切に願って書いています。

――お前も背徳的なギャップ萌えキャラ好きにしてやろうか！？

……次回は『ゾイやみ』本編です。お付き合いください。

２０１８／８／12　流遠亜沙

アンケートに答える

『機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL XXXXXXX』小説ページに戻る